

日本感情心理学会第 22 会年次大会

研究発表要旨（ポスター発表）

5月31日（土） 大会1日目 ポスター発表①

PS01. メール・コミュニケーションにおける顔文字の交換過程が対人感情に及ぼす影響

木村昌紀（神戸女学院大学）

山本恭子（神戸学院大学）

本研究は、顔文字の交換にも返報性が期待されると仮定し、顔文字の交換過程が対人感情に及ぼす影響を検討した。研究1は提案が拒否される状況で、自身の提案メールの影響はなく、相手からの拒否メールに付与された顔文字のみ、ネガティブ感情を緩和していた。研究2は他者に謝罪する状況で、顔文字の返報性によるポジティブ感情の喚起に加えて、自分の期待に反した、相手からの顔文字付与によるポジティブ感情の増幅が示された。

PS02. タイ人はラフカディオ・ハーンの「日本人の微笑」をどう解釈するか。

POTHISITHPORN TIPPAYARAT（神戸大学国際文化研究科）

米谷 淳（神戸大学大学教育推進機構）

林 萍萍（神戸大学国際文化研究科）

「日本人の微笑」(Hearn, 1894)の発表以降、日本人が人前でよく微笑むことが欧米人によく知られるようになった。その論説では、欧米人は日本人が苦しみ、恥、切望などの際に表出する表情（苦笑）を理解できず、しばしば誤解すると論じられている。本研究は、その論説にある3つの場面をタイ人大学生に読ませ、微笑みの解説を調べ、日本人大学生の結果と比較した。その結果、日本人との違いが認められた。

PS03. ネガティブ感情間における喚起場面の相違—大学生の持つ感情観について—

佐藤重隆（東洋大学大学院）

戸梶亜紀彦（東洋大学社会学部社会心理学科）

ネガティブな個別の感情状態（怒り/不安/悲しみ/嫌悪感）が喚起される場面について、大学生を対象として、自由記述法を用いた調査を行った。調査対象者の記述に対して、研究協力者によるKJ法を用いた記述内容の分類が行われた。この分類の結果から、それぞれのネガティブ感情状態において、多様な喚起場面が示され、通常あまり想定されない状況に関する内容も抽出された。また、対象者の属性により記述内容に異なる傾向があった。

PS04. 悲しみ評価尺度の作成および6種類の悲しみ喚起場面における評価の検討

白井真理子（同志社大学大学院心理学研究科／日本学術振興会）

鈴木直人（同志社大学心理学部心理学研究室）

悲しみは、単純なネガティブ感情ではなく複雑な側面を持つ感情である。既存の尺度では、複雑な悲しみの特徴を捉えるには不十分であるとの問題点を踏まえ、悲しみを表現する言葉から悲しみ評価尺度を作成した。さらに、6種類の悲しみ喚起場面における評価の違いを明らかにすることで悲しみの質的な違いについて検討することを目的とした研究を行った。その結果、大きく2つの異なる特徴を持つ質の異なる悲しみの存在が示唆された。

PS05. 悲しみに対する態度尺度作成の試み

杉浦悠子（愛知淑徳大学心理医療科学研究科）

清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）

小川一美（愛知淑徳大学心理学部）

悲しみには幾つかの過程が存在し、人を悲しみ体験から解放するための援助方法も、悲しみの過程によって異なると考えられている。しかし、その過程の存在を明らかにする客観的な指標はない。そこで、大学生を対象に、過去の悲しみ体験に対する現在の態度について調査を行い、尺度構成を行った。因子分析の結果、5つの因子（“転換・前進”，“悲哀・停滞”，“甘受・整理”，“回避”，“後悔”）が抽出された。

PS06. 認知的感情制御と抑うつ・不安の関連—メタ分析による検討

榊原良太（東京大学大学院教育学研究科）

感情制御と精神的健康の関連については、近年多くの研究が行われているが(Gross, 2013)、なかでも再評価や気晴らしをはじめとした、認知的感情制御への注目は一層高まっている。本研究では、認知的感情制御の代表的な尺度である Garnefski et al. (2001)の CERQ を用いて行われた、従来の知見のメタ分析を通じて、認知的感情制御と抑うつ・不安の関連の検討を試みた。

PS07. IAPS のカラー／モノクロ呈示時の感情喚起効果

—感情リアルタイム評定による検討—

櫻井優太（愛知淑徳大学心理学部）

清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）

色は人間の心身に影響を与えることが知られているが、感情喚起スライド (IAPS) の感情喚起効果は、カラー呈示とモノクロ呈示で同等であるという報告がある (Codispoti et al., 2012 など)。これらの研究では、刺激呈示後に行う主観的感情評定法を用いて検討していた。本研究では、感情をリアルタイムに評定させる方法を用いて、カラー呈示とモノクロ呈示における刺激呈示中の感情変動を比較した。

PS08. 持続的な不信感の神経相関

鈴木敦命（名古屋大学大学院環境学研究科）

木山幸子（国立長寿医療研究センター）

國見充展（国立長寿医療研究センター）

大平英樹（名古屋大学大学院環境学研究科）

川口 潤（名古屋大学大学院環境学研究科）

中井敏晴（国立長寿医療研究センター）

ある人物の悪い評判を学習すると、後にその内容の忒意性が判明しても、その人物への不信感は持続する。そうした持続的な不信感の神経相関を検討するため、本研究では、未知の人物の評判を学習した後、その評判が忒意的であることを伝えた上でその人物の信頼性を再判断している間の神経活動を機能的磁気共鳴画像法で測定した。その結果、無視すべき悪い評判に影響された信頼性判断は島皮質の活動と関連があることが示唆された。

PS09. 対人場面における聞き手の態度が話し手の生理反応に及ぼす影響

中川紗江（同志社大学大学院心理学研究科／日本学術振興会）

鈴木直人（同志社大学心理学部心理学研究室）

本研究は、対人場面における聞き手の態度が、話し手の生理反応に及ぼす影響を検討した。聞き手（実験協力者）の態度を無視群、うなずき群、共感群に振り分け、話し手（実験参加者）がスピーチ課題を行っている間の生理反応を測定した。その結果、うなずき群において収縮期血圧および拡張期血圧が時間の経過とともに有意に低下した。したがって、聞き手のうなずき態度が話し手の血圧上昇を軽減させることが示唆された。

PS10. 面子が潰されるとどう感じるか—質問紙法による中日比較—

林 萍萍（神戸大学国際文化研究科）

米谷 淳（神戸大学大学教育推進機構）

中国人は非常に面子を重視すると言われている。中国人が面子を潰されたとき、どのような感情を感じるだろうか。また、感情の強さに、場面、観衆、行為者がどのような影響を及ぼすだろうか。中国人と日本人を対象に質問紙調査を行い、11の場面における3通りの観衆と4通りの行為者の組み合わせについて、7つの感情の強度を評定させた。その結果、場面、観衆、行為者及び文化の主効果が有意であった。

PS11. 教師の受容的態度および学級での三者関係が児童の感情に及ぼす影響

大久保智生（香川大学教育学部）

本研究の目的は教師－当事者の児童－他の児童という三者関係に焦点を当て、教師の受容的態度が児童の感情に及ぼす影響を場面別に明らかにすることであった。小学生 4～6 年生 822 名が調査に参加した。その結果、三者間すべての関係性が受容的態度に対する児童の感情に対して影響を与えているということが明らかとなった。また、他者の存在、場面、三者関係の特徴によって児童の感情に差がみられることが明らかとなった。

PS12. アタッチメントと感情的共感性の関連—ポジティブ・ネガティブ感情に着目して—

今野仁博（岡山短期大学）

近年、共感性の感情的側面において、他者のネガティブ感情のみならず、他者のポジティブ感情に対する共感性が注目されている。本研究では、他者のポジティブ感情とネガティブ感情に対する共感性を別々に捉えた上で、アタッチメントとの関連を多面的に検討した結果、愛着回避は他者のポジティブ感情に対する共感性、愛着不安は他者のネガティブ感情に対する共感性と関連があることが示唆された。

PS13. マグレガー「Y 理論」の基礎に関する覚書—1946 年論文を中心に—

村田晋也（九州国際大学）

河野昭三（甲南大学）

産業心理学者 D. マグレガーは、1960 年著作において Y 理論を提唱した。教科書等による同理論の導出過程についての説明は、心理学者マズローが提唱した欲求階層説を援用したものの紹介にとどまっている。しかし彼がそのような着想に至った経緯は、マズローの考え方のみに依るのではなく、自ら行った実地調査によっても裏打ちされていた。本発表では、この点を彼の 1946 年論文から確認する事を目的とする。

PS14. 改訂嫌悪傾向・感受性尺度日本語版の因子構造、信頼性、妥当性

岩佐和典（就実大学）

田中恒彦（滋賀医科大学）

山田祐樹（九州大学）

本研究では、嫌悪（disgust）の代表的な測定法のひとつである改訂嫌悪傾向・感受性尺度の日本語版を開発し、その因子構造ならびにその交差妥当性、さらに信頼性と妥当性を検証した。その結果、改訂嫌悪傾向・感受性尺度日本語版は、原尺度と同様の因子構造によく適合し、複数サンプルによる交差妥当性も確認された。さらに、十分な内的整合性、再検査信頼性を示すとともに、構成概念妥当性にも支持が得られた。

PS15. 社会的価値の志向性が悲しみを伴った感動に及ぼす影響
—お金プライミング操作と映像『さよならドラえもん』を用いて—

加藤樹里（一橋大学大学院社会学研究科）

村田光二（一橋大学大学院社会学研究科）

他者を愛し献身するという社会的な価値を描く物語には、その価値を見出せるからこそ感動すると考えられる。このことを実証的に検討するため、本研究では一時的に社会的価値の重要度を下げる操作を行い、その操作が感動の強さに及ぼす影響を検討した。実験では乱文構成課題によりお金概念をプライミングすることで、自分一人で何でもできるという自立の状態にし、その後感動的な映像を視聴してもらい感動の程度の評定を求めた。

6月1日(日) 大会2日目 ポスター発表②

PS16. 幼児の指差し行動にみられる注視と表情認知にともなう情動調整過程

中田 栄 (帝京大学)

本研究は、2歳児の指差し行動にみられる注視と表情認知にともなう情動調整の特徴を調べ、表情認知と行動分析から情動調整を明らかにすることを目的とした。その結果、2歳児が笑顔を認知したとき、指差しながら注視し、安心して笑顔に接近する行動が示された。怒りの表情の接近に対しては、怒りを認知した時点で不安、恐怖、緊張を軽減するために逃げるという情動調整の特徴が明らかにされた。

PS17. 「笑うこと」が気分の改善に及ぼす影響

平井 花 (学習院大学大学院人文科学研究科心理学専攻)

本研究では笑うことに関する尺度を作成し、意識的な態度と無意識的な笑顔表出が気分の改善に及ぼす影響を調査した。質問紙調査 ($N_s = 70, 176$) の結果、“笑うことの望ましさ”と“娯楽媒体・施設への接近”の2因子から成る尺度が作成された ($\alpha_s = .83 - .90$)。また実験により、笑いが生じるような映像を見た群では“望ましさ”と表出が気分に影響を及ぼすことが示唆された ($\beta_s = .46, .45, p_s < .05$)。

PS18. 複数人数での資源分配における罪悪感の影響

古川善也 (広島大学大学院教育学研究科)

中島健一郎 (広島大学大学院教育学研究科)

蔵永 瞳 (就実短期大学幼児教育学科)

森永康子 (広島大学大学院教育学研究科)

De hooge et al. (2011)は、被害者に対する罪悪感には被害者への資源分配を増やすが、その被害者に回された資源は自分の分ではなく第三者の分を減らすことで補われていることを見出している。本研究ではこのような現象が本邦においても起こるのかどうかの確認を行った。さらに罪悪感と共に同時生起する恥感情の影響についても合わせて検討を行った。

PS19. 尊敬の心理学的特徴

蔵永 瞳 (就実短期大学幼児教育学科)

樋口匡貴 (上智大学総合人間科学部)

尊敬の心理学的特徴を検討するため、214名の大学生を対象に、各自の尊敬体験を想起してもらい調査を行った。その結果、尊敬を感じる対象は、個人的関係のない他者、上地位者、同地位者、下地位者への尊敬の4種類に整理された。また、尊敬の感情体験は、敬愛と畏怖の2種類があることが示された。このうち、敬愛は交感神経系の言語報告と、畏怖は副交感神経系の言語報告と関連があることも示された。

PS20. 2項目自尊感情尺度の妥当性の検討—評価的側面・受容的側面それぞれに注目して—

箕浦有希久（関西学院大学大学院文学研究科）

成田健一（関西学院大学文学部総合心理科学科）

箕浦・成田（2013）は大学生への質問紙調査で2項目自尊感情尺度による全般的自尊感情測定の妥当性を確認した。本研究は異なるサンプル・調査方法で尺度の妥当性を再確認するため、成人へのWeb調査を行った。また尺度を構成する評価項目と受容項目の特徴も検討した。2項目自尊感情尺度、自己好意/自己有能感尺度等を測定し、相関分析と因子分析の結果から、尺度全体および評価項目と受容項目各々の妥当性が確認された。

PS21. 図形選択課題における情動刺激挿入と作業負荷増加の影響

和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

本研究では、新奇に覚えた図形を指定された順番に選択していくという高次の認知課題における情動誘発や作業負荷の影響を実験により検討した。実験では、課題の連続実施中に交通事故の写真を突然提示するなどして情動を操作し、二重課題状況にするなどして作業負荷を操作した。その結果、図形の選択における省略エラーについて、情動と作業負荷の交互作用が得られた。しかし、他の種類のエラーについては、有意な効果はなかった。

PS22. 選択肢の空間的位置が注意と選好判断に及ぼす影響

大沼卓也（東北大学大学院文学研究科）

坂井信之（東北大学大学院文学研究科）

選好判断において、選択肢の空間的位置が選択に影響を及ぼすことがわかっているものの、その具体的なメカニズムは明らかになっていない。そのため本研究では、商品棚の前に選好判断をおこなう参加者の眼球運動を測定し、選択肢の空間的位置による注意への影響および注意による選好判断への影響を検討した。その結果、特定の位置にある選択肢に対する注意および選好の偏りがみられたものの、両者の間に関連はみられなかった。

PS23. リフレッシュ・キャンプが被災地児童の情動知能に及ぼす影響

庄子佳吾（独立行政法人国立青少年教育振興機構）

国立花山青少年自然の家では、宮城県沿岸部地域に在住する児童を対象に「リフレッシュ・キャンプ はなやまんまる☆きゅんぷ」として、震災によるストレスを軽減し、心身の健康、リフレッシュを図るための事業を実施している。本稿では、参加児童の心理面への影響の検証ならびに今後の復興支援を考える判断材料とすることを目的とし、情動知能に着目した調査を行なった結果、参加者の情動知能に好影響を及ぼす可能性が示唆された。

PS24. ポジティブ感情による行動拡張効果の検討

菅原大地（筑波大学人間総合科学研究科）

本研究では、ポジティブ感情により行動の拡張効果（Fredricson & Branigan, 2005）を検討した。方法としては、ポジティブ感情か統制感情のいずれかに誘導した後に、3分間の自由時間を設定し、その間の行動をビデオで撮影し、机の上の物体（例えば、本やパズル）を凝視する時間と、実際に接触する時間を測定した。その結果、統制群に比べポジティブ感情群は凝視時間が増えることが明らかとなった。

PS25. 情動知能特性と心の健康の検討—学生の専攻別による比較—

橋本由里（島根県立大学看護学科）

平井由佳（島根県立大学看護学科）

本研究ではEQSとSUBIを用い、情動知能特性と心の健康について学生の専攻別による比較を行った。その結果、看護学生の対人対応得点は文系学生、理系学生の得点よりも高く、文系学生の状況対応得点は看護学生の得点よりも高いことが示された。全ての専攻において自己対応得点、対人対応得点、状況対応得点と心の健康度の得点の間に正の相関が認められた。なお、看護学生の得点は平井・橋本（2013）を参照した。

PS26. 特性不安と古典的分化条件づけ—皮膚電気条件づけ事象を用いて—

沼田恵太郎（関西学院大学大学院文学研究科）

宮田 洋（関西学院大学名誉教授）

本研究では特性不安の高低により、分化条件づけの程度が異なるか否かを検討した。条件刺激はPC画面上に呈示される図形であり、無条件刺激は手首への電撃であった。従属変数は電撃予期と皮膚電気活動であった。その結果、前者では不安の高低により分化に差がみられたが、後者で差はみられなかった。これらの事実、特性不安が条件づけられやすさというよりはむしろ、随伴性意識、あるいは認知の過程に関与することを示唆している。

PS27. 保護者の対人関係および子どもに対する働きかけの意識と保育園児の社会的行動

—子どもの笑顔に焦点を当てて—

福岡欣治（川崎医療福祉大学）

先行研究では、母親の情動表出傾向と幼児の行動との関連性が指摘されている。本研究では、保育園に子どもを預けている保護者における育児にかかわる対人関係および子どもに対する意識的な働きかけと、子どもの社会的行動との関連を検討した。保護者264名の回答により、子育て時に頼りになる友人の存在、および子どもへの笑顔での働きかけの意識が、他の子どもといるときの子どもの笑顔の表出と関連することが示された。

PS28. 20代精神科看護師の感情と身体的拘束の見込みに関する研究

石井慎一郎（自治医科大学看護学部）

目的：精神科看護師の感情と身体的拘束の見込みの関係を明らかにする。対象：20代精神科看護師54名，精神科以外の20代看護師44名（対照群）。調査：JWLEISと身体拘束の見込みを評価する仮想事例を用いた。結果：感情指数と拘束の見込みの相関関係は，対照群は感情指数が高ければ拘束の見込みが低い〔負の相関〕を示したが，精神科以外の看護師では〔正の相関〕を示した。

PS29. 小中学生の5因子性格特性と抑うつとの関連

谷 伊織（東海学園大学人文学部）

近年，わが国では子どもの精神的健康に関する研究がさまざまな領域において行われている。問題への予防的介入を実施する上で，精神的健康に関連するさまざまな要因が検討されているが，本研究では特に5因子性格特性との関連を検討した。小中学生4683名を対象とした質問紙調査を行い，共分散構造分析を行った結果，5因子性格特性と抑うつとの間に有意な関連が見出された。

PS30. 選択による選好の上昇は刺激への注意の増加を伴う

—事象関連脳電位を用いた検討—

木村健太（関西学院大学応用心理科学研究センター）

片山順一（関西学院大学文学部）

主体的に選択したものに対して選好が上昇することが知られている。本研究は，選択による選好の上昇に認知処理の変容が伴うかを事象関連脳電位により検討した。実験では二度の風景画像の選好評価の間に同じ評価値の画像二枚から好きな方を選択させた。実験の結果，選択した画像に対して選好の上昇と後期陽性成分の振幅の増加が観察された。結果から，選択による選好の上昇はその刺激への注意の増加を伴うことが分かった。

PS31. 感情刺激とオノマトペとの関連

野中陽一郎（広島大学大学院教育学研究科）

井上 弥（広島大学大学院教育学研究科）

本研究の目的は，顔面表情を説明する際，オノマトペをどのように使用するのかを明らかにすることである。具体的には，6つの基本感情を表す顔面表情イラストを大学生に呈示し，各顔面表情から読みとることの出来る感情をできるだけ多くのオノマトペで表現するよう求めた。顔面表情について得られたオノマトペの反応総数・種類に基づきクラスター分析を行い，各クラスター群にどのような顔面表情刺激が対応するのか関連を検討した。